# 注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
リリカルブレイク

【作者名】
玄狐

【あらすじ】
君は、好きだった作品が嫌いになった事はあるだろうか？
私は、嫌いになった。
そう、狂気に走るほど、その世界を憎悪し、原因を呪った。
神は、こうなる事を望んで私にこの役割を与えたのだとするなら、私はそののど頸を切り裂いてやろう。
何せ、その世界に送られ、再び、あの地獄を体験させてくれたのだから…。

※警告※
ガチでアンチです。
僅かでも嫌悪感を抱かれる方はご遠慮ください。
特に八神はやて・ヴォルケンリッター・グレアム提督・リンディ並びにハラオウン一派にお気に入りがいる場合は早急に回れ右をお願いします。

それでも見ていただけるのでしたら、楽しんでいただけることを祈

ります。

尚、大変申し訳ないのですが作者多忙のため感想への返信が遅かったり行われない場合がございます。

先にお詫びを申し上げるとともにご理解のほどよろしくお願いいたします。

１０月２５日　タイトル一部修正　問題が無ければこのまま、あれば再度訂正します。

# 嘆きの傍観者　～慢心の対価～

君は、好きだった作品が嫌いになった事はあるだろうか？
私は、嫌いになった。
そう、狂気に走るほど、その世界を憎悪し、原因を呪った。
神は、こうなる事を望んで私にこの役割を与えたのだとするなら、私はそののど頸を切り裂いてやろう。
何せ、その世界に送られ、再び、あの地獄を体験させてくれたのだから…。

まぁ、みんな察しの通り僕は、転生者だ。
少々、人と違う人生を送ってこそいたがゲームが大好きな一般人に何が起きたと言われれば、原因は簡単。
事故に遭い、僕は家族を失った。
そのまま死んでしまえば、テンプレートなんだけど、やっかいな事に僕が存在している、と言うより、ここにいる限り僕にとってのリアルはここにある。
リアルがあると言う事は、話が終わるわけもなく、続く。
僕にとってのリアルは死んだ親、妹の葬儀、集ってくる親戚、そして裁判―――
プレスにかけられたように潰れてしまった親と痛みを訴えながら冷たくなる妹、豊かではないにせよ保険金などの臨時収入を目当てに集まる親戚、無論全てではないが。
そして、裁判。
事故の原因をあろう事か此方の責と罵り始めた。
無論、裁判は勝ったし問題はなかった筈だったが、最後の最後でミスを踏んだ。
金がどうしてもほしかった親戚が事故を起こした馬鹿を唆し、見事僕の殺害に成功したというわけだ。
実際、ドラマじゃある意味、使い古された展開だったがまさか自分

に降りかかるとは誰が予想できただろう？
どうやって、親戚があの馬鹿を調べて唆したのかは知らないがな
――――

そうして、俺は死んだ。
ついでに、目が覚めたら識らない天井を眺めていた。
いや、別に赤ん坊になっていたわけではない。
が、体は小さいし違和感がこれ以上にないほど訴えかけている。
だから、かもしれない。
吐いた。
おもっきり、ついでに言えば熱にうなされ、折角、得た二度目の生を無駄にしかけた。
まぁ、事の後であり、落ち着いたからこそこんな感じで話せるが、当時はそんな余裕はない。
と、言っても4歳になる頃にはほとんど手のかからない子供になっていたが…どちらにせよ、妹が生まれた時点で俺に掛かり切りなんて事になる余裕はなくなったわけだがな。
結論的に言ってしまえば、おそらくこれはリリカルなのはの世界であり、俺はその数多い世界の一つに生まれた。
ありがたい事にリンカーコアなどと言う死亡フラグになりかねない危険な物を装備して…。
マニアックな友人ならまだしも、ライトユーザーだった俺はこの世界が正しく史実通り進んでいるかも分からず、頭を悩ませざるを得ない。
何れにせよ、力がある以上は伸ばす必要がある。
主に生き残りをかけるという意味で。
幸いな事に親たちはフリーの魔導師、しかも共にAクラス、俺はこの年で既にBクラス、妹に至っては生後間も無いにも関わらず親と同じAと言う規格外、まさにご都合主義万歳。
残念な事を言うならレアスキルがない事だが、無い物ねだりしたところで変わるわけでもないし危険フラグになりかねない代物など此

方からごめんである。
魔法の勉強は苦にならなかったし、魔力も感覚的に扱える事が理解できると分かると同時にするすると体になじんだ。
楽しかったのは、おそらくここまで。
事の起こりは、其処から更に数年たった時に起きた。
日課となっていた父親による指導が行われ成長を喜ばれたその時、感覚が異常を知らせたのだ。
ちょっと考えれば分かるだろう。
どうやら、一番面倒な時代に俺は生まれていたらしい。
いっそ、新暦になりたてか『彼女ら』がおとなしく隠居する時代に生まれたかった。
何故かって？
そりゃ、言わないでも分かるでしょうによ。
分かりやすく言うとこういう事だ。

「エーリヒ、母さん達を守れ」
素早くバリアジャケットをまとった父親が俺に言うなり目の前の敵に向かっていく。
「ダメだ！父さん、ダメだ、僕らのかなう相手じゃない！」
後を追うか母親の元へ行くか、選択を迫られる。
奴らに余裕はない。
姿を見せたのは『烈火の将』のみ、単独で動いているのか全員で動いているのか？
前者であるならなんとかなる。
父さんには悪いが、死にはしないはず。
問題は後者だ。
他のヴォルケンリッターが母親を襲撃していた場合、後衛に属する母親が対抗できるわけもなく奪われるだろう。
悪いがそれは問題にならない。
最大の問題は妹のリンカーコアが奪われる事にある。

だから、俺は、ただ、急いだ。
そして、そこに、あったのは、倒れている、妹と、その妹を、守り、必死に懇願する母親――――
その懇願を無視し、リンカーコアを黙々と蒐集する見たこともない騎士甲冑を身にまとった――――
赤い髪の悪魔――――
「ヴィィィタァァァァァァァ!!!貴様ぁぁぁぁぁぁっ！」
限界を超えて加速を行う為に溜めを作ろうとした、俺もまた、動けなくなっていた。
「がっ!?ちく…しょう、ちくしょぉぉぉぉぉ!!!」
エーリヒの胸から生えた手は無慈悲にリンカーコアを捉え、光が奪われると同時に力が抜け、そのまま地面に衝突すると共に俺の意識はブラックアウトした。

このような悲しみを二度と生まないためにも。管理局に協力してほしい――――
俺を保護した管理局員が、クライド・ハラオウンが身を犠牲にし時空航行艦エスティア号と共にヴォルケンリターを退けたことを知らせると、骨折した腕を固定したまま何も言わずに横たわる家族を見ていた俺に言った言葉だった。
治療室で目が覚めると一人、エーリヒは霊安室を訪れ、家族の顔を見ていた時、俺の横に立ってそう、切り出したのはある種当然なのかも知れない。
局員はそれだけ言うと霊安室からそそくさと出て行き、残されたのは俺とその家族3人のみ。
化粧を施され眠ったようにベッドに寝かされる3人の遺体は、まだ、そのうち起きあがるのではないかと思わせるほど綺麗に修復されていた。
エーリヒが僅かな水音に気がつき音源を見ると自分の手から血がしたり落ちている事を初めて知る。

どうやら、気がつかないうちに強く手を握りしめすぎたらしい。
先ほど、両親のデバイスから音声と魔法の使用ログなどの情報が引き上げられ、エーリヒもまた、その一部状況を見届けるために現場に立ち会ったのだが。
知るべきではなかったかもしれない――――
聴いたとき、彼は彼の理性が最後まで続いていた事に驚いた。
デバイスに残された情報には、父には声らしい声が残されておらず、一刀両断され地に伏せる音が響き――――
母の妹を見逃して貰うよう頼む悲痛な声が聞こえ――――
妹の劈くような絶叫が壁を震わした――――
父親はシグナムを止めるため一騎打ちをするものの切り伏せられ絶命前に蒐集され、終われば用済みとばかりに討ち捨てられた。
母親の強固な障壁と妹の魔力にものを言わせた抵抗はヴォルケンリッターには受けが宜しくなかったらしく、管理局や余計な増援がくる前に終わらせる。と言う判断の下、父を襲っていたシグナムと俺のリンカーコアの蒐集を行っていたシャマル以外の二人は力ずくで母親の障壁を破壊し、抵抗を出来ない状態にした上でこれを行った。
「…俺、また、ひとりぼっちだよ」
ぽたり、と涙が妹の顔にかかった。
前世の分も合わせれば、年は既に３０を過ぎつつある。
前世でなれた孤独も、もう、達観したと思っていた精神も、『つもり』だったようだった。
「なんで、気が付かなかったんだ…」
物言わぬ家族にゆっくりと語りかける。
そう、シグナムを見たときに気が付くべきだった。
あれは『はやての』騎士ではなく、別の騎士の可能性を考えられる。
にも関わらず、俺は考えなかった。
原作なら、彼女たちならそんなことはしないだろうとどこかで安心していたのかもしれない。
「……ごめん」
妹の頬をそっと撫でると俺の血がべたりと付いた。

慢心のツケがこれだ。
もっとも、どんなに警戒したところで覆すことは出来なかっただろう。
それでも謝らずにはいられない。
ただ、押さえ切れない思いがここにある。
「こんなこと起こしてあいつらは笑っていたのか？」
あゝ、この身は焦がされている。
「奪うだけ奪って、罪を贖う？ふ、フフフフフ…くはははははは」
ふざけるなよ――――
それだけ呟くと静かに霊安室を後にした。

# 嘆きの傍観者　～狂気への切符～

その後、すぐに俺は時空管理局に入り力をつけることにした。
なにせ、いくら父さん達の保険金が下りるとはいえ、いつかはなくなる。
何より、力が欲しかった。
最新の技術が集まりのは軍なのはどこの世界でも変わらないだろう。
今後、彼女らを助ける管理局の手を借りると言うのも微妙な思いがあったが、それ以上に時間がなかった。
原作開始までおおよそ後十年、それまでにＳ―クラスに到達しなくてはならない。
うろ覚えでは在るもののＡ' ｓは分からないがＳｔｓの時の彼女達のランクは大まかにＳ―～ＡＡＡぐらいだったはずだ。
闇の所に身を落とし、力も存分に震えなかったのは希望的観測ではなく間違いないと考えて良いだろう。
そもそも、ランクがそこまで高くなってしまえばＡＡＡ＋のクロノがギリギリ、ＡＡＡである二人もフェイトなら何とか、なのはは経験の差から確実に負ける。
あくまで、ガチで勝負をした場合の話だ。
如何に単体での性能が高かろうと打ち崩すための策がない訳ではないし、黒幕が茶々を入れなければ討ち取ることも可能なはず、と目論見はつけている。
最悪、あちらの手が出せないようにしてしまえばよいだけの話だ。
奇襲は奇襲だからこそ、その価値を現す。
それが知っていた上に対策を練られるとなれば、それは既に下策と成り下がる。
ただ、これを行うに当たり条件がいくつかある。
１つに俺の魔導師ランク、現在Ｂランクだがこれでは話にならない。

彼女達は最低でもＡＡクラスであると認識したほうがいい以上は強化は急務と言える。
これから資質を伸ばせばいいので重大とも言えないが軽視していいものではない。
２つに俺があの現場にいなければいけない。
これは、原作開始時には『アースラ』にいなければ成らない、更に言うなら相応の発言力がなければ奇襲対策を練ることはできず、迂闊に動けば無効に筒抜けになる。
３つに闇の書の処理の仕方だ。
再生能力なんてものを持っている代物に倒す傍から再構成されたのでは堪ったものではない。
原作では本体を何とかし、管理者権限とやらでシステムを切り離し彼女達を生き残らせていた筈だ。
美談ではあるが遺族からすれば納得できる事ではない。
１は、何とか成らない訳ではないはずだ。
クロノも修行に明け暮れてＡＡＡと言う高ランクを取得してる以上、他者にも不可能と言うわけではないだろう。
彼女達から才能がないことを保障されている。
こちらは父さんの欲目があったとしても才能があると言われている、伸びる可能性にかけてひたすらやるしかない。
２は、何が何でもアースラに所属しなければならない、その上で発言力を手にしなければならないが保有制限の問題がある以上、意図的にリミッターをかけて動くか外部から応援で動けるようにしなければならないが、管理局に入って改めて実感した。
リミッターを個人的にかけて配置してもらうと言うのは不可能だ。
そもそも、リミッターなどやろうとすれば直ぐにばれる訳で、闇の書レベルの相手に対処できる局員を遊ばせておく理由はない。
そして、最大の問題は３にある。
詳しくは覚えていないが確か、リィンフォースははやての為にあの４人を遺した。
後継となった八神はやてに怨みはないが、ヴォルケンリッターには

吐いて捨てるほどの憎悪がある。
とはいえ、はやてのヴォルケンリッターへの愛情からどうやっても守ろうとする。
そこからどうやって、事を成すか…それが最大の問題だった。
少なくとも、A' sの時期が終わればそうやすやすと手は出せないだろう、一転して黒幕が保護に回り、ハラオウンから他への繋がりも馬鹿にできたものではないだろう。
なんとも、問題の多いことだ。
人知れず、静かに彼はため息を吐いた。
管理局員になるに当たって最優先されたのは、まぁ、当然だがリンカーコアの再生治療である。
このままでは訓練に参加さえできない。
リンカーコアの治療を行うにあたり詳細な検査を受けたところ、思わぬ誤算が生まれた。
突然変異と言うべきか？
魔力を抜かれ極度に衰弱したリンカーコアを再生するのと同時に新しいリンカーコアが体内に形成され、それに伴い体の魔力容量と変換効率などが大幅に上がりつつあるとの事だった。
タンクが二つできただけ、それほど無いだろうと考えていたのだがこれがとんでもない誤算だった。
確かに出力はあがっているが出来なくなった事の方が多いのだ。
まず、継続的な魔力の放出が出来なくなった。
分かりやすく言うなら砲撃はできる。
フォトンランサー・ファランクスシフトのように小出しで大量と言うのはできるのだが、長時間の射撃…つまり、スターライトブレイカーのような長時間の収束攻撃ができないのだ。
一度放出すると構成が解かれていき、霧散してしまう。
つまりは放出の才能はないと言う生易しいものではなく、マイナスを突っ切っている。
ターゲットを追尾するようにセットしたところで一度、避けられてしまえば構築は解けコントロールが行えず終わり、アクセルシュー

ターのような芸当は不可能、一撃の攻撃力が上がったとしても戦術の組み直しは急務だ。
しかし、悪いことだけではない。
加速や一撃の攻撃力が上がっている。
伝達速度の向上は魔法構築の速度を上げ、今までできなかった動きを可能とし、それ以上に有難いのが爆発的な攻撃力、つまりは出力とそのコントロール性能の爆発的な上昇だ。
飛行は不可能だが、飛跳なら可能。
随時の操作は不可能だが、予めセットした範疇であれば多少は可能。
長時間の魔力射出は不可能だが、一撃に魔力を込めた一撃は可能。
どうあれ、ヴォルケンリッターを討ち取れればそれ以上は求めない。
手に入ったのだ、可能性を、力を、だ。
拒む必要は無くなった。
「ふ、ふふふ、くはははは。あはははははは」
目的が果たせるなら、復讐の業火に自分と言う燃料を焼べてみせよう。

# 嘆きの傍観者　～偽りの終焉～

入局して機会を伺うこと早１０年が過ぎた。
幾度めかの辞令を受け取り、辞令を見た時の失望感は未だに拭えない。
当然とはいえ、やはり残念だった。
「どうする？」
だれも答える人間がいなくとも聞かずにはいられない。
体を鍛え、年は１７を数えた時、それは起きた。
クロノ・ハラオウンのアースラ就任から3年が経過している、つまりは原作開始まで余裕がないことと繋がる。
それまでにアースラへ異動し尚且つ相応の信頼を勝ち得なければならない。
が、それも上手く行かない。
魔力保有量がＡＡＡになった為だ。
保有制限が枷となる。
いっそ、休暇を取ってあちらまで行くか？
いや、駄目だ。
今、この状況で休暇申請が降りるはずがない。
なら、止める？
それこそ下策、正直な話、ヴォルケンリッターと一騎打ちをして勝てる自信など5分もあれば良い方だ。
特性に合わせた戦闘を考え、デバイスもマイスターと行かなくとも設計は出来るぐらいは勉強してみたモノのやはり餅は餅屋に頼むべき、しかし、要望に合わせたモノを作るのは難しいと断られ、作れた伸しても劣化品がやっと、下手な特別製より換えが効く量産の物の方がよいと判断せざるを得なかった。
そもそも、そんな状況の最中でデバイスも量産協力もなしに、一騎打ちに持って行ける状況を作ること自体が実現し得るはずがない。
強襲、奇襲を駆使して討てるのはおそらく1体が限界、優先的に

シャマルを倒すまでは良いがその後が問題となる。
なぜ、シャマルかと言えば理由は簡単である。
後衛を請け負う二人のほうが前衛二人よりよほど厄介なのだ。
シャマルの旅の扉はもちろん、回復から広域移動まで裏方仕事をほぼ万全にこなす。
言ってしまえば彼女がいる限り補給は容易である。
更に言ってしまえば彼女らの戦闘の肝となるカートリッジを奪えるかどうかは大きい。
考えた案や策も１つ２つではない。
しかし、現状とは無常に過ぎ去るものである。
ＰＴ事件の解決、魔導師の襲撃事件と立て続けに発生してしまい管理局全体の警戒心があがっている為、休暇は更に厳しくなった。
申請した休暇が許可された頃には『闇の書』事件は終わっており、被害者の集まりが開かれる事になる。
無駄になった策にがっくりと肩を落としながら参加した俺は更に驚く羽目になる。

『今後の寄り合いは無しとする』

それが、長年こちらに援助してきたギル・グレアムやハラオウン家の援助が打ち切られることになったためだ。
最大の問題であった、ロストロギア『闇の書』が滅んだ為、今後はそれを後に引かぬためにも犠牲となった家族を弔ってやって欲しい。との事だ。
無論、寄り合いをするための援助はなくなるだけで、遺族へに対する援助は続けられるとの事で完全に自立し切れていない家庭はわずかに安堵の息を漏らしたのが分かった。
そんな説明を聞きながら、ああ、そうかと理解した自分がいた。
ディランダルを作るのに必要だった寄り合いは維持する必要がなくなり、八神はやてを保護するために過去を蒸し返さず感情を安らげさせねばならない。

勝手なものだ。
自身で復讐を掲げて、いざとなれば情に絆され他人にもそれを強要する。
方針が変わってずいぶんと過保護なる物だ、彼女の扱い事態は変わっていないが周囲の取り巻き方が変わるだろう。
仮に彼女を見つけたとしても理解を求めるだろうし、仮に、俺のように未だに憎悪に焼き焦がされる人間がいたとしても、個人で動けばすぐに分かるだろう。
何せ、遺族とその集まりは寄り合いで既に情報を集め終えているし、有能な技術者もすでにあちらの情報でつかんでいるのだろうから。
少しでも原作との乖離を期待した俺が馬鹿だったのだ。
この世界に介入要素を無くして変化はない、あるはずがない、蝶の羽ばたきでは変化は起きえないのなら、もっと大きな風を作れるように動けばいい。
ならばと、休暇を使い俺は一人の人物を探した。
目を付けられる可能性など十二分承知しているが、それ以上に価値がある。
俺が知り得るアドバンテージでまだ、賭ける場所は残っていた。
一旦は管理局を去ることも考えたがこちらにいた方が『納得していない仲間』と連絡は取りやすかったし、一人で彼らを討ち取るのは不可能なのは分かり切っていることでわざわざ、そんな下策をとる必要もない。
何せ、危険と隣り合わせではあるものの少ないなれど資金と多くの経験、そして人脈を作ることが出来るのだから。
デュランダルの設計と組み立てを担った人物を、俺は探した。
シェーン・キャクストンそれが、ディランダルの作者であり、今後長くともに行動する仲間であり、未来で『無限の欲望』と言う二つ名をもらった男の名前だった。

## 嘆きの傍観者　～反逆者達の結託～

「初めまして、シェーン・キャクストンさん。デュランダルの設計者とお会いできて光栄です。私は」

挨拶と自己紹介を行おうとして差し止められ、代わりにモニターにいる男性が口を開いた。

「いや、結構、父であるヴェルヘルムとは知らない仲ではなかった。君の方から連絡をもらえるとはありがたい限りだ。エーリヒ・ハルトマン君」

モニターを見た時、俺は驚きを隠しきれなかった。

はっきりと覚えている訳ではない、ただ、おそらくで覚えていた彼と一致していた。

何より、特化されたとは言え、変換資質が無いものでもあそこまで効率よく変換できるデバイスなんて聞いたことがない。

此処にいて、そんな最新鋭のデバイスの情報一つ、いや、開発の噂さえ流れてこないのはおかしいのだ。

下士官には伝わらない？

そんな馬鹿な話しがある訳がない、開発者も人だ、そして開発者は一人で出来るものではない。

なら、そこから少なかれ情報が漏れるはずなのだが…それがない、つまり、情報を密閉することが可能で、資材の消失が起きても問題視されない場所に彼は依頼した事になる。

それが出来る連中の心当たりがあったが本当に当たるとも思っていなかった。

それに、本当に彼と父との間に繋がりがあったのだろうか？

「エーリヒ君？」

不信感をもたれる訳にはいかない、彼が本物であれ偽物であれ、ディランダルを作れるだけの技量があるのだ協力を請う以外に道はない。

「キャクストンさん、お願いがあります」

「何かね？」
「私にデバイスを作っていただきたい…代金は父と母の保険金、足りなければ私が働いて都合を付けます。だからどうか、お願いします」
頭を下げ、懇願する。
割りの悪い話しだ。
下手をすれば向こうも見張られかねない、痛くもない腹を探られる、いや、彼の場合は痛すぎる腹を見せる隙になる。
資金とて俺と管理局提督の立場では用意できるものが違う。
彼と手打つ手無く、拱いた訳ではなく、必死に金を貯め、コネというコネを用意してきたのだろうからその差は歴然といえる。
「理由を聞いても言いかい？」
静かに彼は問いかけてきた。
「ちからが、力が欲しい…今回の事件に私は間に合わなかった、けど、何れまた力が必要になる日が来るはずだ」
手にしているのは武装隊員用のデバイスを手にながら口を開く。
武器の性能が戦局を左右する訳ではない、数や能力、指揮なども合わさるが重要なファクターであることに違いはない。
「だから、力を貯めたい、牙があるなら研ぎ澄ませたい。私のような若造が貴方に頼む無礼は承知の上です。断ってくれて構いません」
別人でもあることを考えて、当たり障りのない言葉を、ただ、嘘ではない本心を告げる。
「ククク…たとえ、一人でもやるつもりかね？」
面白い、と言わんばかりに静かな笑い声が私の言葉を遮った。

頷いた少年を見て思わず笑い声が漏れていた。
退屈極まりない日々、『作られてから』と言うもの私には暇がない。
いや、これが存在意義とされている以上、私に拒否権はないのは解っている。

しかし、だ。
私とて、これを良しとしている訳じゃない
何とかする為に手を作っていた。
が、堅実とは言い難い、ギャンブル要素もある。
こちらが組める手には限りがあり、拡張する為の策を考えていたものの手詰まりの感は否めていない。
其処にこの申し出が飛んできた。
これを僥倖と言わずしてなんとする。
レジアスとは別のパイプを作れるメリットは大きい、更に言えば代価として協力を申し込むことも出来るだろう。
「もちろんだ、ただし、頼みたいことがあるが良いかな？」
「当然です、事には相応の対価を払います」
事なげもなく彼はそう答えた。
数多くの研究をしてきてなお、私の探求心は衰えることはないそんな最中、突然変異を起こした格好の研究素材が訪れた。
闇の書が名前を変えて存在しているのは当に知っている。が、この少年も知っているのではないだろうか？
そう、思わせるほど彼は力への執念が強く、目に同類を思わせる暗い光が宿されている。
「頼み事はおいおいとしてどのようなデバイスをご所望なんだい？」
完全オーダーとなるだろう、彼の体は実に興味深い。
彼に合わせる為にも入念に彼を調べ直す必要がある。
いくら萎縮したからと二つめのリンカーコアが生まれる彼の症例は異常なのだ。
「鎧、フルスキン型を」
「バリアジャケットや騎士甲冑があるじゃないか？」
彼の要望はおかしなものと区別せて当然のおだった。
思わず聞き返した私は当然だろう、私が作るからには相応の作品でなくてはならない。
「いえ、全身を覆う鎧が欲しい…言い方はおかしいかもしれませんが質量兵器を組み合わせたような形が良いんです」

「何故、と聞いても良いかな？」
　彼はすぐに説明を始めた。
「まず、私には空戦能力がない、これは安定した出力放出が出来ない、次に安定して出せるのは短時間と言うより一瞬。なら求めるものは魔力供給さえ行えればすぐに撃ち出せるようにしたものが好ましくなる」
　なるほど、彼は彼なりに考えている。と言うことか、まぁ、確かに彼のアイディアも面白そうだ。
「質量兵器になりますがサブマシンガン、バズーカ、ミサイル、ああいった類の方が想像はしやすい、そもそも、射出後は誘導が全く効かない、出来て事前に動きを組み込む程度だ。なら、いっそ武器を完全に一体化した方が良いと思い自分なり設計してみたのですが」
「見せて貰っても良いかな？なるべく希望に添うようにデバイスは作りたい」
　言っては何だが娘達のデバイスを作っているし、普通の技術者よりは優れている自信はあるのだが彼の要求するデバイスの完成形というのが今一想像しづらい。
「稚作ですが」
　開発と言うには酷いものではあるがアイディアはありがたい。
　どんなものであれ、インスピレーションが刺激されればそれだけでも十分だ。が、モニターに映し出されたものを見て思わず吹き出してしまった。
「ククク、フハハハハハ！良いねぇ、実に良い！久しぶりに意欲が沸いてきた」
　強襲、重火力、支援、狙撃用と銘打たれた武装や各種用途に対応できるよう考えられた設計図に昂揚を覚え、食い入るようにモニターをのぞき込んでいた。
　どれほど考察を重ねたかは知らないが、企画としては十分通用するほど煮詰められた設計案は今までにない斬新なモノだ、何よりコンセプトが非常に面白い。
「このクーガーやランドバルクと言うのは何の意味なのかね？系列ご

とに段階を踏んで強化した機体を作り出したのは解る。しかし、全く別系統がなぜこんなにも思い浮かんだのか…確かに、これは平凡な仕事ではないね」
魔法を質量兵器と見立てて作られたものとして理解できる。
マシンガンをバードポイントやジョインツパーツを用いて武装を固定しており、カードリッジシステムにも対応するように工夫や拡張性を持たせてある。
未だ開発途中とされているＡＭＦを前提とした一撃や必殺を絶対とするコンセプトに強引に盛り込んだ戦闘機能は同居させるにあまりに難しいお題とも言える。
だが、故に燃え上がる。
これほど面白そうな題材、受けなくては私の名が廃る、いや、持ってこなければ私が怒っただろう。
「聖王の話からです。我が家の事はすでにご存じかと…頼んでおいてなんですが、つくれますか？」
「ああ、もちろんだ。いきなり全てを作る訳にもいかないし、足が付きかねない。これ自体には私も興味があるいくらか出資させて貰おう。作りが徐々に複雑化しているのは解るし最後の武装や機器、パーツに至ってはまだ開発途上のものが多い、出来次第君にデバイスを送る形にするがとりあえずは一度、私の家に招待しよう」
彼の問に笑いながら答えると招待する『家』を何処にするか、考えながら私は行う開発に胸を躍らせていた。
そうか、彼はあの『ハルトマン家』の最後の生き残りだったか、なら、この力もわからなくもない、ああ、今日は良き日だ。
なにせ、聖王が途絶えるその日まで仕え、僅かなれど王の血さえ後世に伝え続けた聖王の騎士、その系譜が知識の一端を話すというのだからこれで胸が躍らなければ研究者ではないだろう。

これが、彼と組んだ切欠で、よもや、こうも深い繋がりになるとはおもわなんだ。
が、悪くはない、私はこのとき久しぶりにそう思ったのは今も覚え

ている。

# 詐欺師たちの挽歌　～欲望と切望～

ピンポーン
長閑な住宅街の一角で呼び鈴が鳴った。
メモを片手にエーリヒが呼び鈴を押しながら周囲を胡乱下に見渡し、眉間に皺を寄せながらドアが開くのを待っている。
こんな所に本当に彼がいたのだろうか？
そんなに詳しい訳ではないが、本編に置いて逮捕歴の無かったはずの人間がこんな目立つ場所にいるとは考えづらい。
辛いが…やはり別人なのだろうか？
「ようこそいらっしゃいました。エーリヒ・ハルトマン様ですね？」
開いた扉から出てきた女性が満面の笑みを浮かべて俺に聞いてきた。
「はい、シェーン・キャクストンさんはいらっしゃいますか？」
「ええ、お父様は取引先と通信中ですので上がってお待ちください」
ごく普通の対応、が、彼も闇の書の被害者だったはず、いや、なくなったのは母親だったか？
いや、間違い云々は関係なく優秀な技術者である以上、その交渉に来たのだ。
何者であれ、それは関係ない話しで、仮にスカリエッティであれば是非とも繋がりを作っておきたい。
そんな事を考えながら家に上がるが怪しいものはない。
無論老化から見えるのは限界があり、他人の家をじろじろ見渡すほど不神経でもないし、下手に悪印象を与える可能性のある行動をとりたいとも思わない。
「では、こちらでお待ちください」
が、それは一般的な事であり、相手がスカリエッティで無ければでの話しだ。
「父上はもう少し掛かるそうなのでお茶でもお飲みになったお待ちください」

交渉の事を強く考えすぎて、頭が回らなくなっていたと、後悔したのは出されたお茶を飲んだ直後の事だった。
やっぱり、当たりなんだ―――
急激に襲われる眠気が自身の答えを示してる。
「では、案内します。お父様の元へ」
意識を失う寸前で、彼女の声がよく響いて聞こえ瞬間、確信に至った。

さて、原作を見ていたと言っても完璧ではない。
序に言えば知識に穴が開きつつある。
メモはとってあるが見られたときの危険性を考慮しキーワードだけにしてあるため、細かい場所のフォローまで効くものではない。
しかし、だ。
全裸にされて生体ポットとおぼしきものに入れられ、視線を走らせれば同様に似た様なものに入れられた少女達が数名見受けられる。
「気が付いたかね？乱暴な呼び方で申し訳ないね」
不健康そうな肌に目には隈を作りながらも、その瞳には覇気が漲りしっかりとした足取りで足音を響かせながら俺に問いかけてきたのは、『無限の欲望』その人である。
「いえ、貴方が貴方である以上、安全策は講じるべきだ。私は貴方に依頼を頼みに来た、それは今も変わらない。話ぐらいは聞いてもらえるんだろうか、ジェイル・スカリエッティ博士？」
本物なら、確かにこれぐらいするだろう。
伊達に一度も捕まっていないのだから酔狂だけで姿を現す訳がないのだからこれは予想してしかるべきだったのだろう。
少なくとも、交渉と言えるかどうかは別として話は聞いてくれるのだろう。
そう判断しての返事だが、彼は驚きの表情を僅かに浮かべ楽しげに笑い声をあげた。
「ククク、私は犯罪者だよ？エーリヒ・ハルトマン君、何が君を其処ま

で駆り立てるのかね？」
「復讐、他に何を求めろと？」
「そう、復讐だ。が、闇の書はもう無い。ならば何故、君は未だに牙を研ごうとする？意味はないのに」
待ってましたと言わんばかりに俺の生態ポットに近づきながら言葉を続ける。
「簡単だ。確信しているからだ。闇の書は存在すると。済まないが君に記憶をのぞかせて貰った。が、伝承も闇の書が存在すると確信する情報もない」
こちらの言葉を待たずに好奇心に満ちた子供の様な表情を浮かべ、その動きからは興奮が見て取れる。
「伝承は嘘か？いや、違う。あれはしっかりと考え出されたものだ、質量兵器を知り、その有用性を考え生み出された知恵の塊。妄想で闇の書の存在を確信した？それも違う、なぜなら寄合がなくなると話した時、君は既に闇の書の存在が名を変えて存在し、秘匿されていると確信している。興味深い、実に！そう、君は非常に興味深い！その力もその『記憶』も私の興味を刺激してやまない」
しかし、記憶を覗かれたのに前世が知られていない？
訳が分からない。
俺の記憶は、記憶ではない？
が、頭の中を覗くと言っても全て見れる訳ではないのだろう、言ってみれば前世の記憶は魂に刻まれた様なもので、現世の記憶は脳に記憶される可能性もある、尤も全てが妄想の可能性もあるし、記憶を覗かれ発見できなかった可能性が高い。
「さてね、これこそ、ハルトマン家のレアスキルかもしれないし違うかもしれない。けど、私はそれを覚えていて貴方に提供できる。どうあろうと私は貴方の協力が欲しい、必要なら駒になろう、作品に加われと言うなら喜んでこの身を差しだそう。だから…」
「ク、ククク、いいのかい？好きに弄くられゴミの様に捨てられるかもしれない、頭の中を弄くられ尊厳を踏みにじられるかもしれない、君の願いを聞き届けない可能性だってある」

こちらの言葉に打ち震え喜びの色を浮かべる。
明らかにこちらの反応を見て喜んでいる、想定と違う反応が楽しくてしょうがないのか何なのかは分からない。
が、悪い反応ではない筈だ。
「貴方は、自分の作品に愛情を注ぐのだろう？それに、作品になった者が願っていた夢を貴方は叶える事も出来ない存在ではないはずだ」
問には誠実に思っている事を返す。
「嬉しい事を言ってくれるね。しかし、君は思い違いをしている」
其処まで笑っていたスカリエッティは笑う事をやめ、あごに手を当てながら頷くと悪戯好きな子供の様な顔をしながら言葉を続けて見せた。
「確かに駒は欲しいが何もかも洗脳とは芸がないね、折角なんだ、もっと楽しみたいと思うのは人の常だよ」
何を当たり前の事を聞いているのだと拍子の抜けた表情でドクター俺の質問に返事を返した。
「でも、何故こんな面倒な手段を？」
「目だよ」
彼へ質問の答えは意外なものだった。
「君のその目に惹かれた。何より、君は周りの光景の異常性に気づいたろ？娘達は、ある事情から普通に生まれる事を許されなかった。が、君はそれを聞かずにひたすら、私に依頼を繰り返し頼んできた。なにより」
「なにより？」
「君のアイディアは面白そうだったからね、漸く面白そうな話が聞けそうなんだ楽しくやろうじゃないか」
「じゃあ！」
くすくすと笑いあい、大きく頷いて見せたスカリエッティを見て喜びを押さえきれずに拳を握ってしまう。
「君を歓迎しよう。無論、作品として手を加えさせて貰うが、構わないだろう」
「あ、ありがとう…ありがとうございます！」

ポットの中でなければ涙を流しているみっともない姿だったかもしれない。
でも、構うものか、漸く道が開けたのだから。
カタカタとコンソールを動かす音だけが響き、しばらくして検査が終わった事を告げられ今後についての検討が始まり、いつまでたっても上がってこない俺たちを不審に思い、迎えに来たウーノにより夕食に招待されることになった。

# 詐欺師たちの挽歌　～前夜祭の約束～

「なるほど、量産化を前提として簡素化そしてデバイス設計の第一段階として選んだのは悪くない、こっちの後続も多かれ少なかれその思想を継いで作られている訳だからね、そしてその応用としてこちらがある訳か…確かに一つ一つ詰めて作っていった方が良さそうだ」
「一つ一つに特性があるし混乱しかねないが試作品を一つでも作らないと少なくともこれに取り掛かるのは危険かなと思ったんですが」
「資金面で問題が出ますね、資材でもですが…しかし、ドクター、この武装案は私たちの固定武装にも応用が利きます量産するのはありかと」
　夕食後、ウーノを交えて設計図の検討が行われていた。
「戦闘記録の伝承は？」
「目立った是と言うのはない。が、多数の騎士たちが様々なものを使用している」
「私は機体の装備について聞きたいのですが…」
　次第に議題は加熱していく。
「ふはははは、一撃にかけるその浪漫、素晴らしい、そのサテライトバンカーぜひとも再現したい！続きは!?」
　実は有るかどうかは別として過熱して行く、なんだかんだで詳しく話をすることでデバイスの開発は加速され。
　寝静まる深夜に二人の男が向き合っていた。
「さて、一段落ついたところで質問をしてもいいかい？」
「何なりと」
「先ほども聞いたが君は、君を何が其処まで駆り立てる？これが、君の父、ヴェルヘイムなら理解も出来る。君の母、ニナなら分からなくもない。現に幼い被害者達は復讐を忘れ、正義に胸を躍らせ、年老いた者は犯罪が起きぬよう更新の育成に努め、残されたのは君と同じような年頃の者だけだ」
　その通りだ。

同期で被害にあった連中の殆どはもう、復讐の言葉を口にすることはない。
寧ろ、復讐を掲げ動く俺を殆どが許そうと諭す。
ある意味当たり前なのだ。
幼少のはっきりとした記憶がない者にとっては育ての親こそが親となる。
まだ復讐をしようとする者は俺と年が近いかそれ以上の者しかいないが上の行きすぎれば今度は折り合いを付けて行った。
そして、今回の闇の書殲滅の報を受け同盟は解散となり、それでも闇の書の生存を確信して動く俺は今の段階に置いては異質以外の何者ではない。
今は良い、『仲間』はまだ、『仲間』になっていない。
そもそも、仲間になるかどうかさえ分からないのだが…いや、何よりスカリエッティが訝しんでいるのは消えたと言われながらその存在を信じ、言葉にしないまでも存在を確信した行動に含められている。
「Ｄｒ．スカリエッティ、私は、いや、俺は闇の書が姿を変えて生きていると確信している。あれが死ぬはずがない、あれは必ず俺の前に現れる、その時に戦う力が欲しい」
「その結果、一人で死ぬことになってもかい？」
その目は、狂気に濁っているのだろう。
今更なのだ。
暗い闇から抜けたと思えば、待っていたのはまた失う絶望、それを家族だからと言う理由だけで秘密裏に隠し通す？
痛みを受け入れずに？
そんなものを受け入れるぐらいなら死んだ方がマシだ。
「当たり前だ。今行っても犬死にはおろか生温い情を絆して許しを請われるだけ、襲撃の償いと称して保護扱いの実験動物扱いされる位なら殺された方がマシだ。なら、裏だろうが闇だろうが力を得る為に動くだけだ」
「いや、愚問だった聖王を神格化する教会と袂を分かったヴェルヘイ

ムと姉と姪を管理局の名を汚さないか為に消された姉を持つニナが親でいる以上は当然か」
「やはり、知ってるんですね」
当然と頷くスカリエッティは漸く納得した。
彼は管理局の危険性を理解している。
事実、彼が暴走した場合、こちらの研究素体としてどこかの研究施設に送られることになっていたし、Ｆの残滓も同じだ。
最高評議会も陸海空の上層も変わらない。
だから、彼等の依頼をこなしながら力を貯めている。
犠牲に謝罪をするつもりはない、恨んでくれて構わない、それでも生きたいし終わらせるなら終わらせたい。
「君は後悔しないのか」
「何を？殺す事に？それとも家族を奪う事に？目には目を、歯には歯を、盛者必衰の理を表し、積もり積もった咎は己の身に返る。正義は正義に潰され、それは全てに適用される。無論、俺にもだ」
理解しているのだろう。
自分のやろうとしている事に救いがない事ぐらい。
「君に依頼がある。何れ来る我々の祭りに参加して欲しい」
願わくば、僅かでもこれが救いとならない事を――――
これが、彼との契約。

# 詐欺師たちの挽歌　〜

休暇の間、私の隠れ家に詰めデバイスと身体データを纏めながら手製の料理を振る舞い少々騒ぎになること少々、間もなくして休暇が終わろうと言うときリンディ・ハラオウンから呼び出しを受け、聊か速めに休暇は終わりを告げた。

呼び出された理由は簡単だった。

海から陸への転属願い、それも、受理条件は現在階級の一尉から三等空士に降格。

確かに、ミッドチルダに永続的な勤務を条件としているもののそれは普通の届け出ではない。

「アースラへの転属願いならすぐに受理できるわ、だから、せめて理由を聞かせてもらえないかしら」

リンディが混乱するのはある種当然だった。

彼は一度、陸の勧誘を断っている。

正確に言えば、陸が獲得するはずだった彼は海へ武装隊研修士になるのを承知で赴任した。

理由は、分かっている。

「闇の書がないのに海にいる必要がない。なら、地上を護る」

彼が無理にこちらにいる理由がすでに無いのだ。

「でも、他にも凶悪犯罪は起きているわ。地上が大変なのは分かるけど、こちらが大変なのは貴方も分かるでしょう?」

正直に言えば、彼の能力は魅力的でクロノと併せて運用できれば武装隊の負担も大幅に減らせるし成功確率も変わる。

立て続けに起きた高ランク犯罪を防止した事で周辺の部隊からは協力要請がひっきりなしに来ている。

また、高町なのはとフェイト・T・ハラオウンも嘱託魔導師であり、幼い二人はスカウトしたリンディの指揮からなのはは嘱託、フェイトは保護観察という名目上離れる事が出来ず、参加はまだアースラ以外に認められていない。

同時に八神はやてはリハビリ中で、同事件の中核を担ったヴォルケンリッター達は世間の沈静化を図ると共にはやての世話とリハビリに専念したいとの申し出を受け、リンディとしても遺族側の反応を考え管理局での行動を行動を禁止している。

しかし、はやてのそんな事情を公表できる訳もなく伝える事が出来ない為、協力要請は増える一方、そこで戦力の集中化ではないにせよ小規模な拠点としてアースラを機能させ戦力の増強を図る案が出され、エーリヒが居た部隊を優先的に援護する事を条件に成立した矢先の出来事だった。

確かになのはやフェイトを使う事は出来るが彼女たちには出来るだけ学業に支障を出す訳に行かず、はやてのそばにいて欲しいと考えるリンディにとっては頭の痛い事この上なかった。

「別に無理してここにいたい訳じゃない、管理局を辞めたって構わない。ヴォルケンリッター達は死んだんでしょ？ねぇリンディ艦長？」

彼が未来選択する可能性のあった選択と、ＹＥＳと答えなければならない問を口にしながらも濁った瞳はリンディを睨み付けていた。

必ず、ヴォルケンリッター達を討ち取りたいんです。出来れば、アースラで――――

会う度に彼はこの言葉を口にして転属を願い、暴走の危険性を考慮した彼女は最後までこれを受け入れず闇の書事件を終わらせた。

思えば、彼はこの事件を予見していたのかもしれない。

そう、思えるぐらい彼の希望は強いもので、リンディ達に対して願うヴォルケンリッター達へ討ち取り希望も相当なものであった。

しかし、彼女はヴォルケンリッター達を一人として討ち取っておらず寧ろ、念入りに保護している。

これは、復讐や大小の差はあれど恨み辛みを抱え込んでいる遺族一同に対する裏切りと同じ。

時間をおいて生まれ変わり復元したとして、説明はするつもりだ。

そのために寄り合いを無くし感情の整理と風化させるよう促した、仮に今、彼にその説明しても逆効果だろう。と、リンディは考えており、風化しかけた頃に大凡の事情を説明すれば他の強い憎悪を抱く遺

族同様に説得は十分の可能だろうと思っていた。
逆撫でするより、時間を置いてから一人一人を説得する案を採用する形をとる事にし、タイミングを計る事にしている。
「ええ、もちろんよ」
にこやかに彼の質問を肯定する。
これは最良ではないのは分かっているが他に選択肢はない。
何故ならこれは嘘ではない、確かにヴォルケンリッター達は全員、『討ち取られている』のだ。
「そうですか、なら良かった。安心して地上に行ける」
胸に手を当て嬉しそうに笑う彼が先日までディランダルを作った技術者に会おうとしていたのは知っている。
どのような人物だったのかは知らないが、グレアムから大凡の人物像を聞いていたリンディはそれがジェエル・スカリエッティとは分かるはずもない。
なにせ、グレアム自体がそれに気がついていないのだから。
ただ、技術者と会っただけの事実と彼女の勘が告げる。
彼は笑っているのではなく、嗤っている。
彼を放置しているのは危険だと。
ばれているはずはない、自信もある。
が、それが揺らぐ。
「何か思うところがあったなら相談に乗るし、ちょっと考えてみないかしら？」
視野狭窄とは言わないまでも、妙なところで頑固な部分があるも鍛錬に手を抜かず生き急いでいる感はある彼をリンディは放っておけなかった。
「考える必要があるのですか？もとより、個人的には地上の平穏を護りたい…あれ一つという訳ではないですが海にいる最大の要因が消え、異動希望も今更な感が拭い去れませんね」
だからこそ、気になった。
今まで向けられる事の無かった感情を込めて暗い光を湛えた瞳がリンディ自身に向けられている事に。

目で態度で言葉で言っているのだ。
あんた、意図的に外しておいて今更、俺を呼び出して何のつもり？
―――
侮蔑とも敵意ともとれる視線が笑顔を浮かべるリンディには何より痛いのは間違いなかった。
「あの、エーリヒ君？」
彼が怒る理由も分からなく無い、ひたすらに今回の一戦に向けて鍛えてきたのだ。
有事の際は呼ぶとさえ、言っていたのに梨の礫として扱えば、どんな人間であれ起こるだろう。
彼の事件に遭ってからの時間の殆どを費やしていたのはリンディとて知っている。
それを無碍にして、『今更』なのだ。
「用もないなら、失礼を」
咄嗟にリンディが手を伸ばそうとするが周り右をして退室しようとするエーリヒに何を言うべきか言葉が回らず空を切ってしまう。
まずい、とリンディは焦る。
焦る事など無いのだが、彼の在り方は拙いと経験から警鐘が鳴っている以上呼び止めねばならないが、彼が纏う空気は剣呑なものとなりつつあり、迂闊な理由で止めるのは躊躇われた。
これで次の交渉を失敗してしまえば挽回する機会はない。
其処に救いの手が洗われた。
エーリヒに反応する前に扉がスライドし、其処には新しく家族になったばっかりの少女とその少女を見て固まっているエーリヒが居た。
「母さん、クロノが…あ、ごめんなさい」
フェイトが口を開こうとして来客に未だ対応中だった事に気がつくと頭を下げ、下がろうとする。
「いえ、問題ありません。私はこれで失礼するので…しかし」
頭を下げるフェイトに固さが多少残るものの柔らかく声をかける。
リンディに向けていた表情とは明らかな別物であるのは間違いな

い。
父方は誰一人残らず、母親の方も唯一残っていたはずの叔母が唯一『作った』忘れ形見を残し無くなったばかりだ。
これがＰＴ事件において、要請可能であった彼という札を切らせなかった理由。
ニナ・ハルトマン、元の姓をテスタロッサ――――
プレシア・テスタロッサの甥であり、唯一の親族が裏切るもしくは妨害の危険性を考慮したからだ。
「フェイト嬢、叔母は、プレシアは君に何も告げなかったのだね」
すれ違いざまにフェイトの耳元で囁くとそれ以上何も言わずに転送ポートへと進むんで行く。
「えっ⁉あ、ま、待って！待ってくださいっ！」
そのエーリヒをおうようにフェイトを追いかけていく。
それを見ていたリンディはできるなら、フェイトにも引き留めて欲しいと思う一方で本当の母親には未だにかなわない事を痛感してしまった。
「まだまだ、ね」
小さくつぶやき、彼とフェイトの後を追っていった。